

メッセージアウトライン サムエル記第一11:1～15

「王政の樹立」

[1]「さて、アンモン人ナハシュが上って来て、ヤベシュ・ギルアデに対して陣を敷いた。ヤベシュの人々はみな、ナハシュに言った。『私たちと契約を結んでください。そうすれば、あなたに仕えます。』

「アンモン人」…イスラエルの祖先アブラハムの甥ロトの子孫。ヨルダン川東部の地域に住んでいた。→創世記19:36～38 「ナハシュ」…蛇の意 「ヤベシュ・ギルアデ」…ヨルダン川の東方数キロのギルアデの地にあった。

アンモン人は士師エフタの時代にイスラエルに領土を奪われていたので(士師11章)、それを奪い返そうとして侵入して来た。ヤベシュの人々はアンモン人にとってもかなわないと見て、彼らと契約を結ぼうとする。契約を結ばないと総攻撃を受けて滅ぼされることになる。

[2]「アンモン人ナハシュは彼らに言った。『次の条件でおまえたちと契約を結ぼう。おまえたち皆の者の右の眼をえぐり取ることだ。それをもってイスラエル全体に恥辱を負わせよう。』」

右目をつぶせば、左目は左手で構える盾でおおわれるので戦えなくなってしまう。それで戦うこともできないヤベシュの者たちとして彼らをさげすみ、さらにはイスラエル全体を辱めることになるのである。

[3]「ヤベシュの長老たちは彼に言った。『イスラエルの国中に使者を遣わすため、七日の猶予を与えてください。もし、私たちを救う者がいなければ、あなたのところに出て行きます。』」

ヤベシュの長老たちが七日の猶予を願い出て、ナハシュがそれを受け入れたのは、イスラエルの国中に救う者がいないと考えたからであろう。そうなれば、ヤベシュの人々はアンモン人に全面降伏するほかに道はなくなる。

[4]「使者たちはサウルのギブアに来て、これらのことばを民の耳に語った。民はみな、声をあげて泣いた」

「サウルのギブア」とはサウルの住んでいるギブアの意。サウルはすでに王に選出されていたので(10章)、ヤベシュの使者たちは真っ先にギブアに来たのかもしれない。使者たちのことばを聞いて、ギブアの人々も絶望感からか、声をあげて泣いた。残念ながらそのときサウルはいなかった。

[5]「ちょうどそのとき、サウルが牛を追って畑から帰って来た。サウルは言った。『民が泣いているが、いったい何が起こったのか。』彼らは、ヤベシュの人々のことばを彼に告げた」

サウルは王とされていたが、実際はまだ父の畑仕事を手伝っていたのである。
[6]「サウルがこれらのことばを聞いたとき、神の霊がサウルの上に激しく下った。彼の怒りは激しく燃え上がった」

サウルは謙遜であり、気性の荒い人物ではなかったが、このときは神の霊が下ったことにより、彼の怒りは激しく燃え上がったのである。

[7]「彼は一くびきの牛を取り、それを切り分け、使者に託してイスラエルの国中に送り、『サウルとサムエルに従って出てこない者の牛は、このようにされる』と言った。主の恐れが民に下って、彼らは一斉に出て来た」

「くびき」とは畑を耕すときなどに、牛や馬の首の部分にかけて、それぞれが別の方向に行かないようにする横木のことであり、それゆえここでは牛二頭のこと。

さばきつかさとして全イスラエルに名前が知られているサムエルと王に選ばれたサウルの連名で戦いのための招集がかけられ、それに従わない者の牛は、送り付けられた牛と同様に切り分けられるとの警告がなされた。これは協力と一致を求めるための象徴的行為である。そのとき主の恐れがすべてのイスラエルの民に下ったので、彼らは躊躇することなく一斉に出て来た。

[8]「サウルはベゼクで彼らを数えた。すると、イスラエルの人々は三十万人、ユダの人々は三万人であった」

「ベゼク」…マナセ部族の領土内でヨルダン川の西約20キロメートルの地。ヤベシュ・ギルアデからはヨルダン川を渡った西南西にあたる。合計三十三万人の戦う民がそこに集結した。

[9]「彼らは、やって来た使者たちに言った。『ヤベシュ・ギルアデの人にこう言いなさい。明日、日が高くなるころ、あなたがたに救いがある。』使者たちは帰って行って、ヤベシュの人々に告げたので、彼らは喜んだ」

ベゼクからヤベシュ・ギルアデまでは一日の道のりである。イスラエル人たちは一日かけて進軍し、アンモン人と戦い、打ち破る。早朝から攻撃を開始すれば正午ごろには勝利することになるというのである。ヤベシュの人々はこれを聞いて大いに喜んだ。もはや片目をつぶす必要もなく、アンモン人の奴隷になることもない。

[10]「ヤベシュの人々は言った。『私たちは、明日、あなたがたのところに出て行きます。あなたがたの良いと思うように私たちにしてください』」

これはヤベシュの人々がアンモン人に言っていることばである。
「明日、あなたがたのところに出て行きます」このことばは七日の猶予を明日で切り上げるという通知で、降伏するか出撃するかは、ぼかしてある。

[11]「翌日、サウルは兵を三組に分け、夜明けの見張りの時に陣営に突入し、昼までアンモン人を討った。生き残った者は散り散りになり、二人の者がともにいることはなかった」

「三組に分け」とは三方から攻撃を仕掛けるため。単純に分けても一方向に十一

万人ずつが攻め込むことになる。「夜明けの見張りの時」とは午前三時から六時頃を意味する。戦いは圧勝となり、アンモン人はバラバラになって敗走し、二人の者がともにいることはないほどの壊滅状態であった。

[12]「民はサムエルに言った。『【サウルがわれわれを治めるのか】とやったのはだれでしたか。その者たちを引き渡してください。彼らを殺します。』」

イスラエルの民は戦いに勝利した勢いで、かつてサウルが王に選ばれた時、「サウルがわれわれを治めるのか」とサウルを軽蔑した者たち(10:27)を引き渡してください。彼らを殺します。とサムエルに願う。勝利の喜びにひたるうちに彼らの勇壮感には傲慢へと高まり、ついにかつてサウルを軽蔑した者たちを殺そうとの思いにまで発展する。まるで自分たちは全然悪いところがなかったかのようにふるまう。しかし、自分たちも不信仰であり、アンモン人の脅威のために泣き叫んでいたのではなかったか。

[13]「サウルは言った。『今日はだれも殺されてはならない。今日、主がイスラエルにおいて勝利をもたらしてくださったのだから。』」

サウルは民の思いあがった進言に乗らず、主なる神に栄光を帰し、この勝利は主によってもたらされたものであり、今日はだれも殺されてはならないといさめる。ここにサウルの主なる神への信仰と謙遜、寛容を見る。自分に敵対する者を粛清するよりも、寛容をもって許す方がどれだけ素晴らしいか彼はわきまえていた。→コロサイ3:12、Iテサロニケ5:14~15、Iテモテ1:16

[14-15]「サムエルは民に言った。『さあ、われわれはギルガルに行って、そこで王政を樹立しよう。』民はみなギルガルに行き、ギルガルで主の前にサウルを王とした。彼らはそこで、主の前に交わりのいけにえを献げた。サウルとイスラエルのすべての者は、そこで大いに喜んだ」

サムエルはヤベシュ・ギルアデの人々も含めてギルガルで王政を樹立することを提案する。「ギルガル」→エリコの南東、ヨルダン川の西、数キロメートルの地。ここはかつてヨシュアに率いられたイスラエルの民がヨルダン川を渡って最初に宿営した記念すべき場所であり、そこにも主を礼拝する聖所があった。→Iサムエル7:16
1サムエル10章ですでにサウルはミツパで王として立てられていたが、イスラエルの民はこの度のアンモン人との戦いでさらに示された王としての立場を主と全イスラエルの前に公に承認した。民はみな大いに喜び、そこで主の前に交わりのいけにえを献げた。「交わりのいけにえ」とは神と人との間の平和と交わりをあらわす献げ物で、神に献げた残りを祭司と献げた者とで食する。→レビ記3章

神の霊がサウルの上に激しく下ったとき、サウルの怒りは激しく燃え上がり、アンモン人との戦いの先頭に立って、イスラエルに救いをもたらした。使徒の働き2章においても神の霊が激しく下ると、どのようになるかということを教えられる。→ペンテコステの出来事。

生まれつき小心で臆病な者たちを聖霊は力づけ、どんな圧迫にも負けない勇気ある者に変えていく。ペテロは主イエスがユダヤ人たちに捕らえられた時、その後について行ったが、ユダヤ人たちの問いかけに、三度もイエスを知らないと否定した。しかし、その後、彼は死より復活されたイエスに出会い、悔い改めて立ち直り、聖霊の力により、逮捕、投獄、死の危険があるにも関わらず、大胆に福音を宣べ伝える者となった。ステパノ(使徒7章)しかり、他の弟子たちしかりである。

神の民から確信を失わせ、勇気を奪おうとするものがどのようなものであっても、神の霊は無気力な者や重荷に打ちしおれている者を立たせることができるのである。

サウルの時代も初代教会の時も、そして今も同じ神が生きて働いておられる。私たちもこの時代にあって不信仰や弱気になるのではなく、代々の信仰者を強く生かした主なる神に従い、強くされて生きよう。→使徒1:8, ローマ8:31, ペリピ4:13